

ごみ日和

京都発！ごみ減量情報誌

106号

大丈夫。ごみは、まだまだ減らしていく
ます
同志社大学経済学部准教授 原田 穎夫さん

清掃活動で地域と繋がり、企業の環境への
取組を融資を通してサポートする
京都中央信用金庫さん



多世代が力を合わせ、西陣地域の魅力を発信！
西陣地域ごみ減量推進会議

京都市ごみ減量推進会議





清掃活動で地域と繋がり 企業の環境への取組を 融資を通してサポート



京都中央信用金庫 総合企画部
広報・サステナビリティ推進グループ課長 上田未来さん

京都中央信用金庫といえば、京都で暮らしていると街中で何度も目にすること、だれもが知る大手信用金庫だ。各地域に支店を持ち人々の暮らしを支えている。それだけに地域活性化への取組も多岐に渡り、どこからどう説明していいのかわからないほど。環境問題についても熱心で、京都府内金融機関初の「きょうと生物多様性パートナーシップ協定」を締結するなど、紹介しきれないほどの多様な取組を推進している。今回は、そのなかから「ごみ日和」として気になる「ごみ減量」にまつわる4つの取組について紹介する。

「ゴミゼロ活動」を通して環境への取組を広める

京都中央信用金庫は、全国の信用金庫約250機関のなかで預金・貸出金ともに第一位という最大手。地域との繋がりを持つ頼もしい存在だ。そんな京都中央信用金庫の、ごみ減量の取組について伺うために本店を訪問した。話を伺ったのは、総合企画部 広報・サステナビリティ推進グループ課長の上田未来さん。まずは、ゴミゼロ活動のきっかけについて伺った。「当金庫では2009年に地域社会の持続的発展のため、『On Your Side ~地球がうれしい~』をスローガンに環境方針を定めました。從来、各支店が自主的に近隣の清掃活動をおこなっていましたが、京都議定書採択の地である京都に根ざす信用金庫として、末永く環境を守る取組を続けていこうと、金庫創立75周年(2015年)を機に『ゴミゼロの日 全部室店一斉清掃』を開始しました。ゴミゼロ活動では、各拠点、各支店において、5月30日(ゴミゼロ)の前後の休日に、職員がボランティアで、各店舗の周りを清掃します。清掃活動することで、どんなゴミが出ているか、どうすれば少なくなるかという発想につながるんだろうという目的もあります」。金融機関の方が店舗周辺を掃除しているのを見かけるが、これは防犯という意味もあるそうだ。なるほ



ど掃除や身だしなみは信頼を築くための重要な要素と云われるが、金融機関はいつも掃除が行き届き美しい。そもそも掃除が習慣化している職員たちにとっては、もしかすると、ボランティアの清掃活動に対するハードルは低いのかもしれないと思った。京都中央信用金庫では、この「ゴミゼロ活動」以外にも地域清掃活動をしており、「鴨川を美しくする会」さんの呼びかけで、鴨川を清掃したり、滋賀県内の支店が「琵琶湖一斉清掃」などに取り組んだりしている。

「金融機関には伝票や契約書などで業務をおこなう紙の文化が根付いていた」ということで、独自のリサイクルシステムを導入していますが、リサイクルの過程で発生する熱や電力などの課題もあり、これまでさまざまな試行錯誤を重ねてきたそうだ。

電子稟議の導入、そして、窓口業務もタブレットへ

では、どのように紙を減らしていくのか伺った。「まず、金融機関に多い稟議システムについて、早い段階で電子稟議を導入し電子化したこと、営業店でも紙の量が非常に少くなりました。その後、各自のノートパソコンでの業務により紙の量もさらに減り、デスクトップ型と比べて省エネになりました。さらに、店頭ロビーおよび窓口にタブレット端末を設置し、これまで複数の伝票や申込書類への記入・捺印が必要だったお手続きを、お客様によるタブレット端末への入力操作で完結させ、記入負担を軽減するとともに、お手続き時間の短縮をはかりま

した。これにより大幅なペーパーレスの実現が可能となりました。ただ、窓口に来られる方は高齢の方が多く、しばらくは、お客様の隣で、操作のサポートをしながらということになります」。今年10月から始まり順次移行中だそう。



2025年10月より導入した新営業店システム

みやこ柳木のネームプレートなど物品のエシカル化

プラスチック製の手提げ袋の廃止、現金封筒のATMコーナー設置終了、環境にやさしい素材を使った通帳への切り替えなどもおこなってきた。マイクロプラスチックによる海洋汚染防止、木材の地産地消への貢献を目的として、役職員のネームプレートをプラスチック製から地元木材の端材を活用した「みやこ柳木製」に変更。上田さんのネームプレートを見せていただいたが、あたたかみがある。「職員にも好評です。お客様には、SDGs

に取り組む姿勢を知っていただき、意識を向けてもらえたらしいなと思っています」とのこと。



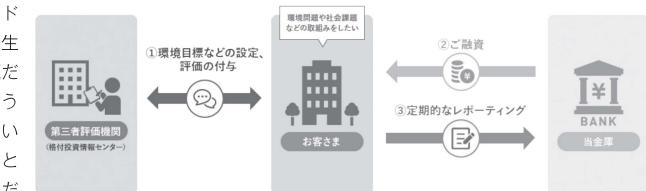
みやこ柳木製のネームプレート

環境問題に取り組む企業への融資「グリーンローン」

サステナブルファイナンス*についても伺った。環境にまつわる取組に要する資金を調達するための融資「グリーンローン」の取組は、「ごみ日和」としても非常に気になるところ。「例えば、使用済み紙おむつのリサイクル事業を営む会社が、工場を建ててリサイクル活動ができるようにするという取組に対して融資しました。こうした融資を通じて、お客様や社会に対して良いインパクトを与えていくと、サステナブルファイナンスにも力を入れています」と上田さん。融資実行後の管理や審査が厳しいのか聞いてみると「お客様と一緒に目標を決めて、それに対してフォローをしていきます。できていないなら、その経緯や、どうやったらできるのかを相談し、アドバイスをさせていただくという形です。地域創生部にサステナビリティ担当が在籍し、環境課題だけでなく、社会課題、SDGsに代表されるような課題への対応をどういう形で取り組んだらよいか、営業店の担当と伴走して支援しています」とのこと。融資を受ける企業側にも心強い仕組みだ。

そのほか、紹介できないほどの多種多様な取組について、ぜひ、公式サイトをご覧いただきたい。地域の金融機関の存在のありがたさと強さを知るいい機会となった。

*サステナブルファイナンスとは、環境・社会・ガバナンス(企業統治)の要素を考慮した融資や投資などの総称。



京都中央信用金庫

〒600-8009 京都市下京区四条通室町東入函谷鉢町91番地
TEL : 075-223-2525 FAX : 0120-201-580 (フリーダイヤル)

公式サイト <https://www.chushin.co.jp/>



「時代によりそう京都・伏見の日本酒」



京都の伏見では、燐（かん）酒や冷酒、そして京都の料理に合う日本酒本来の姿を持つ純米酒が作られてきました。伏見は日本酒の歴史と地域に密着した酒造りが魅力的であり、この地域を語る上で欠かすことのない存在となっています。

今回取材させていただいたのは、正保二年（1645年）に創業し、大正中期から伏見の地で酒造りを続ける招徳酒造の蔵元、木村紫晃氏です。「米と米麹だけ作られる純米酒こそが日本酒本来の姿である」と教えてくださいました。その背景には、時代の変化とともに歩んできた日本酒の物語があります。

変化する日本酒のかたち

日本酒の中でも米と水、麹だけで作られているものを純米酒と言います。日本酒とは言わずに純米酒と区別するのはなぜでしょうか。それには戦争が関わっています。戦時下では、食糧不足が深刻化し、日本酒の生産も大きく制限されました。しかし、軍需をはじめとする需要は依然として多かったため、限られた米の量で日本酒らしい味を保つ酒造が模索され、その結果アルコールを添加して作る醸造酒の技術が発展しました。戦後になると、食糧生産は徐々に回復ましたが、復興に伴い日本酒の消費量は急上昇しそれを補う製造が要請され、醸造アルコールを添加して製造された日本酒がほぼすべてを占めるようになりました。

この状態は長く続き、一方で日本酒の国内消費は1970年代をピークに長期の漸減傾向となり、近年では最盛時の三分の一以下になっています。そして「日本酒本来の姿」を取り戻そうとする動きが広がりました。その際に、アルコールを添加した日本酒やその他の酒との区別をつけるために、米、水、麹だけで作られる日本酒を純米酒と呼称するようになったそうです。

酒造りで生まれる、ぬか・酒粕の利活用

米と水、麹だけで作られる純米酒は、四季や気候といった自然との共存によって作られてきました。その製造過程においては環境負荷が小さいイメージですが、近年は新しく開発される商品には温度管理が重要なものもあり、エネルギーの使用は課題になりつつあるとのこと。また、製造過程において発生するぬかや酒粕の活用方法についても、検討する余地があるといいます。ぬかは、伝統的に友禅染に使用する糊（のり）の業者や漬物業者が買い求めることが多かったそうですが、現在は業界の需要も変化しています。酒粕は、2tの酒を造る際に約250kgできるそうです。小売店などで販売されますが、一般客が購入するのは寒い時期が主流となっています。そのほかには家畜の餌にも使われますが、それでも廃棄が発生します。しかし、廃棄を減らしたいからと酒粕が少なくなるように酒造すると、味わいが変化してしまうので、バランスが重要であるそうです。

招徳酒造では酒粕を使用した酒粕アイスを販売しています。また、各地の酒造では吟醸バスクチーズケーキや、利きかりんなど、酒粕を活用した商品が開発・販売されています。このように商品化が進む一方でまだまだ使い道があることから、さらなる活用方法については、若い世代にも期待が寄せられています。



木村氏と筆者

～はじめての燐酒飲み比べレポート！～

燐酒の種類と目安の温度	
種類	温度
日向燐	30度
人肌燐	35度
ぬる燐	40度
上燐	45度
熱燐	50度
飛び切り燐	55度以上

最近は燐酒を飲む人が減っているということを聞きました。私にとっても馴染みがありませんでした。そこで、招徳酒造の純米吟醸「花洛（からく）」を、日向燐から飛び切り燐まで飲み比べてみました！それぞれの目安となる温度は表1の通りです。その結果、上燐や熱燐は日本酒の味わいがありとてもおいしく感じました。飛び切り燐は熱く過ぎたのか、インパクトのある強い味を感じました。冷酒に比べて飲みやすさがあったのは大きな発見でした。温度調整をおこなって、これからも楽しみたいと思いました。

取材日：令和7年11月21日（金）

執筆者：京都光華女子大学キャリア形成学部キャリア形成学科3年 中田 鈴子

なごみ
日和

KBS 京都 アナウンサー

うみひら なごみ
海平 和

●● 第47回 「3Dプリンタの可能性、変わる未来」 ●●

近年3Dプリンタへの注目が高まっていることをご存じでしょうか？3Dプリンタとは、3Dデータを元に立体物体を作り出す機械でプラスチックや金属などの材料を少しづつ積み重ねることで部品やおもちゃ、医療用の義肢なども作ることができます。今年、和歌山県では建設用3Dプリンタで作られた駅舎も誕生したそうです。

先日そんな3Dプリンタの技術を目の当たりにする機会がありました。京都市西京区大原野、善峰川を渡る橋につながる道の盛り土の擁壁（コンクリートの壁）が、まさに建設用3Dブ

海平 和：京都市出身、2010年KBS京都入社。テレビ「京都経済テラス キュンと！」、ラジオ「さらばん！キョウト」などに出演。



人と物と。 織りなす「もっふん」物語

村上椅子



第34回

昔は綺麗だった椅子、今でも捨てられない椅子、それらが再び輝きだすお店が「村上椅子」だ。ご夫婦でこのお店を営む村上有佳さんにお話を伺った。

このお店は「座面の張り替え」、「Re:椅子」*、「定番商品」の販売という形で椅子を取り扱っている。「座面の張り替え」は、いわゆるお直しのこと。「Re:椅子」は、リメイク商品の製作販売だ。

「座面の張り替え」ではコーディネーターに徹する。例えば布であっても手入れしやすいものがいい人もいれば肌触りをとても気にする人、自ら余っている生地の方がエコだからと選ぶお客さまもいるという。お客さまが「どこを大事にされているのかということを汲みとて」張り替えを行うのだ。また、制作過程で出てしまった端切れを活用して座布団やクッションを作り、展覧会等で売っている。店とお客さま、その両方がサステナブルな選択肢を自然に選んでいる。

「Re:椅子」では座面の張り替えとは一転して、椅子を「表現の場」として自由にデザインする。ミシンの掛け方や布を自由に使って生み出される椅子たちには村上椅子さんの「椅子というものは、本来、長く大切に使うものである」という考えが浸透している。張り替えや、修理を通して長く使える椅子を作りたいと語ってくれた。「Re:椅子」は捨てられそうになっていたものを引き取ったり、自ら買ってきて作られる。

思いのこもった椅子を直したい。ともに人生を歩いていく椅子が欲しい。そう思う方こそこのお店を訪れて欲しい。

▶村上椅子 〒602-0045 京都市上京区近衛殿北口町190 murakami.isu@gmail.com

ショウルーム 月～土 10:00～18:00 予約制 ご来店の前にメールでお知らせください。

*「Re:椅子」とはアンティークとは言わないが、40年、50年、時を経た椅子を安心して使えるように修理し、古い物の良さを残しつつ、現代の暮らしに馴染むよう張り替え、再生したもの。



江本 和弥（2025年10月22日取材）

多世代が力を合わせ、西陣地域の魅力を発信！

堀川上立売から西へ約250m、元西陣小学校の西隣にある西陣児童公園では、年5回、「地域をつなぐ 西陣の朝市マルシェ」(以下、西陣のあさいち)が開催されております。

1997年、成逸、西陣、桃園、聚楽4学区の小学校が統合され、京都市立西陣中央小学校が誕生。これを機に「西陣まちおこしの会」が結成され、西陣のあさいちは本会を中心となり、2012年から活動を続けています。

今回は、「西陣まちおこしの会」西陣学区代表で、西陣地域ごみ減量推進会議会長の藤林宏さんにお話を伺いました。

西陣のあさいちで「資源物回収」を実施！

西陣地域ごみ減量推進会議では、上京エコまちステーションと協力し、あさいちが始まる午前9時～11時まで、資源物回収を実施^{*1}しています。取材日はあいにくの雨模様でしたが、約20人が回収ステーションに立ち寄ってくれました。大きな衝撃を受けると発火する危険があるリチウムイオン電池の回収^{*2}についての質問が寄せられ、エコまちステーションの職員が丁寧に説明する場面もあり、「家の近くで回収してくれることは本当に助かる。商品を購入する時はよいが、捨てる時にお金がかかる時代。不要になった時のルールを知っておかないと、みんなが困ります。」だから、行政と力を合わせ、地域の皆さんの役に立つことには積極的に取り組んでいこうと思って…、藤林会長の想いが伝わります。

地域の暮らしに役立つことを進めたい

西陣地域ごみ減では、西陣のあさいちの資源物回収の他、



藤林宏会長



雨天時も、資源物回収を実施

使用済てんぷら油の回収も行っており、また、地域のイベント等では給食の牛乳パックをリサイクルしたためぐレットペーパーを啓発に活用するなど、ごみの減量について考えてもらう機会を作っています。

2023年度には、京都市ごみ減量推進会議が主催したスーパー・マーケット等の「お店のプラスチック調査」報告・学習会に参加するなど、地域住民の学びの場も大切にしています。

もう一つ、京都市パイロット事業で、藤林会長が立ち上げに尽力された西陣学区の憩いの場『茶房 はと利べ』では、提供されたコーヒーの残りかすを「mame-eco（コーヒーかす再利用プロジェクト）」にお預けして、地域での資源循環にも貢献しています。毎月「8」の付く日に開催される『はと利べ』は、西陣のあさいちと並ぶ、学区の宝です。

多世代が交流できる場を目指して

西陣のあさいちは、コロナ禍の影響で1回開催できない時期がありました。2022年6月から再開。再開後は、西陣中央小学校の元PTAメンバーが「西陣まちおこしの会」と協同し、地域の子ども達や子育て世代の交流の場としても定着してきています。また、同志社大学の学生ボランティアグループ『ARC』、『SAP (Shinmachi Activate Project)』も運営に参加、若い世代を巻き込みながら、地域の魅力を発信する場として熱量を感じる取材でした。

*1…古着類、雑がみ、ビデオテープ等の記録媒体類、電池類、インクカートリッジ、蛍光管が回収の対象。

*2…リチウムイオン電池などの充電式電池は、各区役所・支所のエコまちステーション、上京リサイクルステーション他で回収しています。詳しくは二次元コードをご確認ください。



○地域をつなぐ 西陣の朝市マルシェ

開催情報は、二次元コードをご確認ください。



松村 香代子（2025年11月9日取材）

『わたしのごみ減らし術』▶修理修繕で物たちのいのちを大切に。

長い間、寝床の近くに置いて頼りにしてきた目覚まし時計。ある日突然、動かなくなってしまった。購入店に持っていくと「修理不可、新品を買う方が手っ取り早い…」と言われてしまいました。

困った！どうすれば…。思い出したのが、修理をしてくれそうな時計屋さん。故障した柱時計と合わせて持参。手にするや、細いドライバーを取り出して、サッくと作業。2つともカチカチ針が動き出したのです。

今、京都ではリペア（Repair）といって壊れたものを自らの手で修理修繕し、もう一度、暮らしによみがえらそうという活動が話題に。衣類、宝石類、家電など、捨てずに修理修繕をしてみませんか。リペアの機会を提供している取組を右に紹介します。技術の時間



リペアカフェ京都

修理店検索サイト「もっふん」